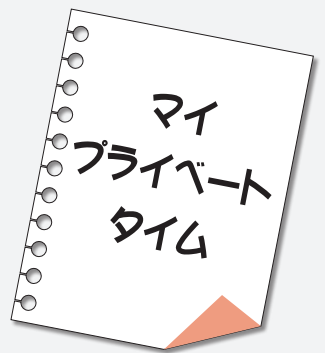


命が活かされた

わしま 輪島市長(石川県) **梶** かじ **文秋** ふみあき

Fumiaki Kaji



北前船の船主等の居住地として栄えた「黒島地区」の町並み

みなとまち輪島

輪島市は日本海側の真ん中に突き出た石川県の最北部に位置し、三方を海に囲まれた能登半島にあり、漁業や朝市、輪島塗や観光で有名な所です。人口は約3万人ですが、面積だけは石川県で3番目の大きさで約426km²もあります。かつては5万人の人口を有したこともありましたが、自治体の知名度とは裏腹に少子・高齢化と過疎に悩む小さな自治体です。

この地域は、かつて「能登國」と呼ばれ、北前船が日本海を往来した時代には「親の湊」と呼ばれ、北前船の拠点港の一つとして巨万の富を得た船主が多数いました。室町時代の海の法律「廻船式目」に記された三津七湊の十港の重要港湾以外にも、輪島市門前町の「黒島港」等には、千石船を10隻以上有する豪商が何名もいて、その町並みは今や国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。もちろん、北前船の寄港地は全国に多数ありましたが、時代は次第に近代化に向けて変化し、帆船から蒸気船に、海上

交通から鉄道輸送へ、さらに自動車へと輸送手段の変化は、半島地域にとって圧倒的に不利になっていきました。鉄道や道路は経済の中心地である大都市部から整備が進み、地方へ波及するには大変な時と予算を有することから、日本海側の時代は大きな遅れを余儀なくされてきました。

無謀とも言える挑戦とその理由

ところで、私が輪島市長になったのは平成10年のことでした。それまで市の職員を20年近く勤め、衰退しつつある市勢に憂いを感じ、42歳で退職し市議会議員になりましたが、議員が有する権限には限界があり、2期目の途中で市長選への出馬を決意しました。しかし、先輩や同僚、仲間から翻意を迫られたことは当然のことでした。それを聞かずに49歳で立候補し、何とか当選することが出来、以来今年で17年目となりました。

実は、こんな無謀な人生に挑むには自分なりの理由がありました。それは20歳の時でした。夜、職場の寮で急に咳き込み突然に咯血したのです。救急車で病院に搬送されましたが、自分ではなぜ血を吐いたのか、その理由さえも理解できませんでした。診察の結果「肺結核」だと言われ、しかもかなりの「重症」だと聞かされました。「すぐにも入院しなければだめ

だ」と矢継ぎ早に医師に言われ一旦は、その病院を出ました。その夜、寮の床に就き回顧しました。家庭の事情もあり、18歳で進学を断念し、早く独り立ちしなければと焦る人生を生きる日々でした。ここでまさかの病に伏し立ち止まるとは、と愕然としました。しかし、この時点ではまだ事の重大性を理解していた訳ではありませんでした。翌朝、大阪を発ち加賀市片山津町にある「国立石川療養所」の受付に立ちました。古い木造の建物で結核専門の病院らしく、12病棟あるうちのほとんどが結核病棟で、一家の大黒柱や母親、小児結核の子どもまでが入院生活をしているのです。重症患者や退院を控えた患者、無理をして再発し再入院した患者などがさまざまに思いを抱きながら病院生活を送っていました。

診察結果が言い渡されました。「患部は大きく、病巣が3つ隣接して存在している。悪化してそれがつながると病巣が巨大化し、肺の血管が露出し大咯血の可能性がある。大咯血は死の可能性を意味す



今では大型客船が停泊する「輪島港」



市民とともに観光客をもてなす筆者



多くの田植えボランティアでにぎわう「白米千枚田」

る。仮に完治するとしても入院期間はおよそ5〜6年間はかかる」とのことでした。死などという実感はありませんでしたが、自分にはそんなに悠長に過ごす時間が無いという焦りが複雑に体を震わせ、目の前が暗くなるのを感じていました。とりあえず自分の病室が決まり、ベッドに着きました。かつて

の陸軍傷痍軍人病院をそのまま使用しているためベッドは木製、マットは藁で出来た体育の授業に使うような堅いもので、床は節穴を透して地面が見えており、夏は冷房が無いのでベッドごとの蚊帳をかけて寝るといふものでした。私の病室は重症部屋でした。入院して数日後、夜中に看護婦がばたばたと出入りし始めたのです。自分の向かいの患者に異常が起きました。「喀血だ！」大げさに言えば洗面器に一杯も

の出血でした。窒息しないように気管に詰まる血液を吸引器で吸い出し、一旦収まったものの、朝までに2度目の喀血を起こし、彼は亡くなりました。衝撃でした。これが自分の病気であり、死と直面するという意味でした。以来、何人もの療友が亡くなり、結核の怖さを知りました。ある日、看護婦長の勧めもあり、病院の図書館に行きました。哲学のコーナーから数冊の本を選び、読みあさりしました。入院で苦しむ患者が読み込んだらしい手垢が付いています。「神は、苦しみに耐えることの出来る者にしか苦しみを与えない」「伸びんと欲する者は先ず屈せよ」「迷った時はイバラの道を択べ」など、次から次と自分の置かれた境遇に自暴自棄になって、平衡感覚を失いかけている精神を戒める言葉が目に入ってきました。

ある日、体重が30kgほどにやせ細った病院の主のような重症部屋の患者が私の部屋にきました。「君が最近入院してきた梶君か、焦らずしっかり治しなさい。この看護婦長はマスクをしていないだろう。彼女は患者との距離をマスク一枚でも縮めようと思っているんだ。そのため感染し、自分も入院した。そして退院してからも同じ気持ちで患者に接しているんだ。君の主治医もそうなんだ。自らのリスクから逃げずに患者を治そうと頑張っている。患者がその気持ちに感謝し、自分も治そうとしないと…な」と言ってくれました。それ以来、毎日顔を出してくれていましたが、ある日、その顔を見ることはありませんでした。その日の朝、静かに息を引き取ったとのことでした。

私は、その人の話を聞いて以降、心が落ち着き、自分だけが不幸の主人公のような気持ちになり荒れていた事にも気がつき、「この際、時間を惜しまず徹底して病氣と向き合おう。入院の期間は逆に自分の人生観を見直す絶好の機会だ」と考えることにしました。

人生に未熟な私にとって、この時多くの本や人との出会いに満ち、一度失った命を再び生かされることになりました。「この命を是非、人のために使おう。自分を温存せず、迷った時こそイバラの道を択ぼう」と決心し、病院を後にしました。

NHK連続テレビ小説「まれ」

退院後、夢の中で、何度も再発して再入院している自分の姿にさいなまれつつも、何とか今日まで、その時の人生教訓をもとに、市長として市民のために頑張っています。過疎の能登にも平成15年には能登空港が開港し、現在は能登自動車道の整備が進められ、来年春季にはNHK朝の連続テレビ小説「まれ」の舞台として能登が全国に紹介されます。まだまだ地域の元気を訴えていくことができそうです。